

---

# 恋のあとさき 追いかけてる

茶山ぴよ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

恋のあとさき 追いかけてる

### 【Nコード】

N0312D

### 【作者名】

茶山ぴよ

### 【あらすじ】

5月迄休載中（お詫びは12話後書きにて） 「カレシ」と  
かいて、ブランドもんとかアクセサリーみたいなもんなんだろ。  
女って「そう言い放って次々に彼女を替える松浦峻。16才の秋、  
沙雪が出逢った彼はしびれるような喜びとときめく時間、そして哀  
しみを沙雪に教えた。そして彼自身、恋してはならない人を忘れら  
れずにいた……。

## 1　すべてがそこから流れ始めた

何十回のセックスより、たった一回のキスが忘れられない。

気がつくと、いつもあの人の夢を見ている。

時間はいつも、16才のあの2学期に戻っている。

今までの悲しかったことは、全部夢だったんだ。

あたしたちはこれからなんだ。

これから一歩ずつお互いわかりあって近づいていけばいいんだ。

あたしが安心して、あの人の名前を声にしようと思ったとたん…  
…アラームになる。

冷たい朝の中に、あたしはあいかわらず取り残されている。

心がねじれるような悲しみも。

ただの青空がせつなくなるような喜びがあることも知らずにいた

最後の日。

あれは 夏休み最後の日だった。朝から台風が通過したあの日。十年間で最大級、とっていたわりにはそれほどでもなかった。いつもそつだ。すごい台風が来るぞ来るぞ、と脅かされるわりには、いつも肩すかしを食わされる。

「そんなにいきおいよく引つ張ったら、ガラスが割れちゃうわよ」

「はい」

母に注意されて三次沙雪<sup>みよしさゆき</sup>は、家中のガラスに張り付けたガムテープを慎重にはずしていた。

台風の接近が予想されるたびに、沙雪のうちではこうやってサッシ窓にガムテープを貼りつける。

風のいきおいで何かが飛んできてガラスが割れたときに飛び散るのを防ぐためだが、一度も何かがあつたためしもないし、お風呂に汲んでおいた水を使ったためしもない。

台風が来る前に、英国旗みたいな模様でガムテープをガラスに張り付けたり、カップラーメンを準備しておくのは楽しい。

うなるような風の音、窓に叩きつけるような雨も、遊ぶ予定さえなければワクワクするイベントだ（学校がある日だったら、確実に補習を休めるからさらに嬉しいのだけれど）。

でも、何事もなく通過した後でベタベタしたガムテープを跡を残

さないようにはがすのは、ただただ面倒くさい。

ガラス窓は家の中にまだ何枚もあって、沙雪はうんざりした。

ちなみに父は台風の勢いがおさまった午後から出社しているから、母と二人で後始末をしなくてはならない。

いや、母は夕食の支度にとりかかってしまったから、家中のガムテープをはがすのはいつのまにか沙雪の役目にされてしまった。

ため息をつきながら、父の部屋のガラスに取り掛かろうとしたとき、沙雪の頬に、金色の光線が降り注いできた。

目をあげると、ついに厚い雲が割れて、そこから夕日が差し込んでいるところだった。

「キャン！」

振り返るとパグ犬のぐう太がリードをくわえてしっぽを振っていた。

友達のレイコにいわせれば『情けないカオの犬』だが、今は目がキラキラしている。ぐう太にも台風が行ってしまったことはわかっているのだ。

「そうだよねー。散歩にいかなくっちゃねー」

沙雪はぐう太を抱き上げると頬ずりした。ちょっぴり犬臭い。だけど沙雪には懐かしい匂いだった。

「お母さん、ちょっと、ぐう太の散歩に行ってくるねー」

ちよつと沙雪、ガムテープは？ という母の声を残して沙雪は金色に染まった外に走り出た。

何か、キラキラしたものに会える予感 漠然としたものだけ  
ど が沙雪の足取りを軽くしていた。

「ぐう太、ちょっと待ってよ！ あんた、はりきりすぎ！」

沙雪はぜいぜいと息を荒げてうなだれた。

ぐう太は『グズ！』とからかうように振り返るとキャン！と鳴いた。

長い人工の砂浜が続くM浜は、ぐう太お気に入りの散歩コースだ。沙雪のマンションからここまで歩けば15分かかる。

名前通り朝からぐうたらしていたくせに、ぐう太ときたら、早くここに来たいばかりに沙雪が小走りになるばかりの速さでリードを引っ張り続けたのだ。

明日から9月とはいえ、べったりした暑さの中、競歩かジョギングを強制された沙雪は「もうだめ……」とぐう太のリードを離れた。

ここならぐう太も沙雪もよく知っているし、パグのぐう太が人に危害なんか加えないのはわかっている。

ようやく息が整って、背筋をまっすぐにすることができた沙雪は、目の前の光景に思わず声をあげた。

すごい。雲が燃えてるみたい。

厚く空を覆っていた雲の下から顔を出したオレンジ色の夕陽は、今まで雲に隠されていた仕返しとばかりに、雲全体を黄金色に輝かせていたのだ。

そしてその下に広がる海もまた、波を金色にキラキラと照り輝かせていた。

「きれい」

予感はこの美しい風景に出会える暗示だったのだろうか。

沙雪はすっかり息が整ったにもかかわらず、しばらく黄金色からピンクゴールド色に変わっていく空と海に見とれていた。

振り返ると、このM浜に建つガラス張りのタワーを初め、海浜ぞいに建つビルも同じ色に輝いている。

沙雪が生まれたのは名前の通り北の街だけど、砂浜のすぐそばに未来都市のようにガラス張りのビル群が立ち並ぶこの街の風景は好きだった。

しばらく見とれていた沙雪だったが、あんまりぐう太を放ってお

いてもいけない、とぐう太が走っていた方向に歩きはじめる。ちょうど夕空が照り輝いている方向だ。

といってもたいして心配はしていない。

この道を西にまっすぐに進むと大きな川の河口に出る。河口に添うような堤防はそのまま防波堤となって海に突き出ている。道はそこまでなのだ。

太陽はどんどん赤くなり……触ったらやけどしそうな色になり、雲はピンク色の綿菓子のような色になった。

ううん。綿菓子とも違う。それ自体が発光しているようなちよつときついピンク。

あんな色のネイル、いいなあ。

再び見とれそうになった沙雪は、最終地点である防波堤の上を走るぐう太を見つけた。

どんなマニキュアでも出せないような光輝くピンクを背に、短い脚で必死でちょこちょこ走るぐう太のシルエットは可愛くて……思わず沙雪は微笑む。

写真に残したい。携帯を取り出そうとして、ぐう太の短い鳴き声にハッとする。

見るとぐう太は防波堤の先端に腰かけている人に興味を示したらしい。親しげにしゃべりを振っているのが見える。



いけない。

飼い主である沙雪にはいとおしいぐう太だけど、他人はわからない。もしかして犬嫌いかもしれない。

沙雪は走った。防波堤の上、ぐう太が向かっていった一番先に向って走る。

台風の影響か、防波堤に上ると案外風が強い。沙雪は暴れ始めた髪を押さえた。

一番先にいるのはどうやら若い男のようだった。

やや背を丸めたシルエット。

長くはない髪の毛が強い風にあおられて、逆光できらきら輝いていた。

煙が同じように輝きながらたなびいているところを見ると、煙草を吸っているのだろうか。

どうやら突然やってきたぐう太を邪魔にするようでもない。

ぐう太は、その男の横にちゃっかりと座ってしっぽを振っていた。

「す……」

うちの犬が、すみません。

儀礼的な謝罪の言葉は、沙雪の中で行き場をなくした。

それほど、整った横顔を持った男だった。

いや、横顔だけでない。

沙雪は確かに見てしまったのだ。

ぐう太の隣に腰かけていた若い男の頬で、筋になった涙が空と同じ色に光っていたのを……。

涙をたたえた瞳が、夕陽の色に輝いて……でもとてつもなく哀しげだったのを……。

沙雪にとって喜びも、悲しみも、すべてはそこから流れ始めたのだ……。

## 2 一ヶ月で彼女を替える最低男 1

「サユ、サユってばア。も〜」

ハツと我に返った沙雪を、蝉の鳴き声のリフレインがシャワーのように包んだ。今日から2学期、つまり秋の始まりだというのに、夏休みに入った日とそのポリュームは変わらない。

そして廊下側の窓に肘をついているレイコのぶすつとした顔にようやく気付く。何度も呼ばせてしまったのに、うわのそらだったらしい。

「ごめ。何？」

沙雪は謝るとあらためて訊き返す。

「何、ぜんぜん聞いてなかったのオ、ちょー。サユのためのハナシなのに」

レイコはぷーっとふくれる風をした。

それもそうだ。

始業前の朝のひととき。理系・9組のレイコは、わざわざ長い廊下を移動して沙雪のいる3組まで話しに来てくれているのだ。

7月の席替えで沙雪が廊下窓側の席に替わってから、レイコはこうしてたびたび来てくれる。

沙雪が通う高校　学区内でまああの進学校であるJ高校は2年になると文系と理系にクラスがわかれる。

一見ギャルだけど目の輝きがそれだけじゃないレイコは理系、なんにも考えずラクなほうへ流れた沙雪は文系に進んだのだ。

沙雪は少しそれを後悔している。

なぜならレイコにいる理系クラスは男子が圧倒的に多いからだ。女子15人につき男子は30人もいるのだ。

それに対して沙雪のクラスは、男子20人、女子25人。加えてこっちにいる男子はややチャライ気がする。

まあレイコにいわせれば、理系もオタクが多いだけ、とのことだけれど羨ましい。

本当は男女の割合の問題よりも入学式からの友達であるレイコと離れ離れなのが何よりも寂しいんだけれど。

「何、何？」

沙雪は、レイコに気を取り直してもらおうと、身をのりだした。合コンがどうの、といった気がするけれど、本当はあんまり興味ない。

そんなことより……沙雪の頭の中を占めていたのは昨日の夕映えだった。輝く夕陽を映して同じ色でキラキラ光っていたあの瞳。そして涙。

沙雪が目にした中で一番美しい夕映えの中で、それ以上に輝いてみえたキレイなコ。

男の子に「キレイ」なんて言葉を考え付くなんて変……そう思いつつも、あの青年の姿を形容するなら「綺麗」としかいいようがない。キレイ　綺麗　古典風にいえばきらきらしい。

そして、彼は……あんな美しい空の下で、どうして泣いていたのか。

昨日から、気がつくとそのことばかり考えている。

男の子が、夕陽を見ながら泣く理由……よほど辛いことでもあったんだろうか。例えば失恋とか。

「……明日ね、実力テストが終わったら、合コンあるから」

あぶない。また聞き逃すところだった。沙雪はかろうじて思考を目の前のレイコに残すことができた。

「えー。相手はー？」

「男バス。みんな2年だよ」

男子バスケ部。確かにみんな背が高い。下級生に人気ある。でも、ぶつちやけ興味もてない沙雪だ。

「ふーん。レイコくるの？」

「あたしがいかなきゃ、サユ来ないでしょうが」

「ゲー。彼ぴにいいつけてやるー」

「もう知ってるもんねー。サユのお供だつて」

ベー、とレイコは舌を出した。レイコは近くにある男子校に1つ年上の彼氏がいる。

「ホント、サユのためなんだからね。もうすぐ修学旅行なのに彼氏いない歴まもなく17年でさみしいだろうって」

「るせー。よけいなお世話だつてば」

レイコの言うとおり、沙雪にはまだ彼氏と呼べる人がいたことは、今までに一度もない。

「えー、サユつてずっと彼氏いないの？」

見えなーい、と隣の席のアッコが口をはさんできた。でしょー？とレイコ。

「何人かにコクられてるのに、断ってるんだよー」

「へえー、もてるんだー、サユ」

アッコはマスカラをビシバシつけたまつげでまたいた。冷房のないこの教室は暑い。朝なのにマスカラは少しだけ下まぶたにじんでいた。

男子だけでなく、このクラスの子はケバいい人が多くて……沙雪はなんとなくついていけずにいる。表面上はまあ、交流しているけれど、表面だけ。

「17にもなるのに、彼氏いたことないなんて、天然記念物くない？」

アッコはケタケタと笑った。「天然記念物く」って、何語。沙雪は心の中でちよつとケイベツする。そういう自分だつてときどき変な日本語使つくせに、なんか嫌だった。

それを聞きつけて、斜め前の席にたむろしていたチャラ男A・Bが

「何、三次さん、彼氏いないのー？」

「うっそでしょ。三次さん、ビジンなのに」

と寄ってきた。そんな、と言いかけた沙雪は、アッコの様子にハッとした。

「だよねー」と返事しながら、アッコは、沙雪が美人といわれたのがあきらかに面白くないらしい。ケバイ顔から笑顔が消えていた。

「とりあえず、気軽に付き合ってみればいいのに」

レイコがそういったとき予鈴が鳴り、彼女はあわてて9組へ戻り、チャラ男たちもそくさと自分の席へ戻っていった。

沙雪は『そんなことないよ』と否定するチャンスを逸した。

今日は2学期の始業式　といっても、沙雪の学校では、夏休み中の8月20日から毎日補習があったから、あまり夏休みが終わってしまったガツカリ感はない。

昨日の夏休み最後の日も、たまたま週末と重なっただけだ。

その貴重な土日が台風でだいなしになり、がっかりした生徒も多いのかもしれない　たとえばデートが台無しになったりとか。あのコも……彼女とそれでケンカしたりとかかな。

気がつくともまたあの美少年　いや美青年といったほうがいいか……のことを考えている。

「今日ね、転校生が来るらしいよ」

再び脳裏に広がり始めたピンクゴールドの夕映えはアッコの声で遮られた。隣を振り返ると、アッコはさらにこっそりと囁いた。

「転入試験満点、しかもイケメンだって」

よかった。さっきのこと、あんまり気にしてないらしい。

沙雪はアッコの様子にほっとする。

「へえ。2学期に転校生って珍しくない？」



沙雪が不思議に思うように、県立であるJ高校は、欠員がでないと転校生の受け入れはない。しかもそれは年度初めである4月に限定されていた。

「それが、そのコのお父さんがエライ人らしいよ。市だか県だかの」

「へえ」

「なんでもN高校をクビになつたらしい」

「N高校！」

県外にもかかわらず、沙雪でも名前を知っている名門男子校。毎年週刊誌で発表される「東大合格者ランキング」の上位の常連である学校をクビ、つまり退学になってここに転校してくるというのだ。

「アツコ、なんで知ってるの？」

「実はね。あたしの友達の彼氏なんだ。友達はC女子に通ってたんだけど、8月からつきあって……」

アツコが得意げに続けようとしたそのとき、ガラスと教室前の引き戸があいた。

ドカドカと勢い良く担任が入ってきた。

その後ろに続いた背の高い生徒を見て、沙雪は、あつと声をたてそうになった。

それは……昨日の、夕陽を受けて泣いていたあの彼だったからだ。

### 3 一ヶ月で彼女を替える最低男 2

あるとき。

あの茜色の防波堤の上で。

彼の視線は、沙雪に駆けよるぐう太に引き寄せられるように、こちらに向いた。

そのまま 彼は啜っていたタバコをもみ消し涙をぐい、とぬぐった。

目がくらむような夕映えを背にした逆光の中で、彼が涙を流していたことは、沙雪だけが知る幻になってしまった。

彼はそのまま立ち上がったから、思わず沙雪はあとじさりする。

それほどの背の高さだった。

それきり沙雪と目も合わせずに、横を通り過ぎた。

すれ違つ一瞬、潮の匂いが乱れて……苦い香りが残った。

それで沙雪は我に返る。

それまでずっと息を止めていたみたいだった……。

「三次さん、三次さんってば」

沙雪はハッとした。

頬にビリビリくるような重低音がリズムをきざんでいる。

覚えのあるリズムは最近流行っている曲。

「ハイ」とすかさず差し出された分厚いリスト。ここはカラオケだ。そうだった。

試験が終わって、バスケット部の男子と合コンにきているのだ。

男子クラスの子が5人、それと沙雪をはじめ、彼氏のいない女子4人+。

いかにも、もう2か月足らずに迫った、修学旅行前の付け焼刃合コン。

「三次さんは、ふだん何歌うの？」

男・女・男・女の順で座っているから沙雪の隣にも男子がいる。

体が沈むようなソファだから、隣のそのコとは膝が触れあいそう  
だ。

顔立ちはまあまあ。バスケット部だからすらつとしているし、服とか髪型がおしゃれだから、パツと見イケメンにみえる。

でも、近すぎて。

沙雪は、そのコの頬にいくつかある、ニキビあとを少し嫌だと思  
った。

あの涙が伝っていた頬には、そんな瘢痕はなかった気がする……。

それに、ちょっと香水がキツくて。

沙雪は車酔いの前兆のような錯覚に一瞬みまわれた。

「歌、ヘタだから」

「ふーん。そう」

男子は沙雪の素気ない返事を聞くなり、くるっと反対側のコに振  
り返った。

あまりにわかりやすい行動は、少し腹立たしくも可笑しくもある。

沙雪は、まあいいや、とテーブルの上のウーロン茶を手を取った。

あいにく、ごつい氷ばかりのそれに飲める液体はほとんどなくて、  
沙雪は大きいばかりのグラスを傾けた。

「あ、三次さん、なんか頼む？ ……俺もたのも」

低いテーブルの向かいから、レイコと話してた幹事役のコが気を  
つかってくれる。

たしか、バスケ部2年でリーダーの古田くんっていったっけ。眉がちよっと下がっていて童顔だけど、優しいヒトだな

でもたしか、レイコによれば彼女がいるって話だった。

彼女いるのに、友達のためにわざわざこんな会を企画するなんて、きつと性格もいいんだ、と沙雪は目星をつける。

「そういえばさ、三次さんのクラスに松浦くんって転校生来ただろ？ すっげーイケメンの」

古田芳樹は、アイスカフェラテを沙雪に手渡しながら笑った。

「俺、同中なんだ」

一瞬……こころの中を見透かされたような気がした……。

昨日。

『松浦 峻』

先生が黒板に名前を書いている間も。

「H県から転入してきた松浦 峻君だ。まつしゅんみんな仲良くな。……わか  
らないことがあつたら学級委員の くんくんに聞いてください」

黒板から振り返った先生が、型どおりの紹介をする間も。

彼はつまらなそうに教壇に立っていた。

いや、つまらなそう、という不満を含むニュアンスでなく。

もっと……気が抜けたかんじの……そう、心ここにあらずといった言葉のほうがふさわしいかもしれない。

先生より頭ひとつも上にある顔は完全にそっぽを向いていて、耳たぶにあるピアスだけが教室の面々に向って光を投げていた。

その態度は見ようによつては不遜とさえいえるもので　とにかく「照れ」とか「緊張」といった転入性にありがちな表情は彼の顔には浮かばなかった。

だけど、その整った顔立ちゆえに。

女生徒が多い、この教室の生徒たちのざわめきは、反発とは違った色合いを早くも帯びているようだった。

「静かにしなさい。……じゃ、松浦くん。自己紹介をしなさい」

先生にうながされて、彼はようやく視線を新しいクラスメートに向けた。

自然に、いったんざわめいたクラスが、静まり返る。

「……松浦です。よろしくお願いします」

その低めの声は、沙雪の腹のそこをふるわせるかと思った。

そして……彼が自分を見つけないか、と恐れる。

そう。あとき、沙雪は確かに恐れていた。

恐れながらも……彼はきっと自分に気付くだろうと思った。

だって、出会ったのはあの一瞬だけだったのに　沙雪のほうは彼をすぐわかったのだから。

声に触発されたように、心臓が、体を重く震わせる。

その振動が表に出ないよう苦しみながらも、沙雪は彼を見ずにはいられなかった。

だけど、彼は気付かなかった。

彼は一番後ろの席につくために沙雪の横の通路を通った、それなのに。

彼が沙雪に気付いた様子は、まったく見られなかった。

沙雪は息を凝らしたまま、祈るように　彼が横を通り過ぎるのを待っていた。

「あ、松浦くん」

ちょうど、沙雪の横に差し掛かった時、彼は先生に呼び止められて立ち止まった。



背の高いガクランは、威圧感の塊のように沙雪を上から圧倒した。

このときはさすがに沙雪もうつむいていたけれど……見なくても感じられる彼の気配に、鼓動は最高潮となる。

「ピアスは校則違反だ。はずしなさい」

「……ハイ」

意外なほど素直に、沙雪の横で立ち止まったままの彼は耳たぶに手をやった。

昨日の、苦い香りが降りてくる。

雨にぬれたアスファルトのようなそれが……沙雪にはすでに切ない。

#### 4 一ヶ月で彼女を替える最低男 3

「あいつ中学の時、同じバスケ部だったんだ」

「へえ。背高いもんねえ」

相槌を打つレイコは、さっき3組に遊びに来た時に松浦峻を見ている。

どうして古田芳樹が今ここで彼の話をするのか。

まさか心を見透かされているのでは、と沙雪は気が気でない。

合コンはカラオケに盛り上がるグループと、転校生・松浦の噂話をする芳樹・レイコ・沙雪に分断されていた。

会話はときおり大音量の歌に妨害される。

だけどそんなカラオケの重低音の中でも、沙雪の中では心臓が違和感となつてしきりに主張する。

まだ沙雪の気持ちを知らないレイコは、さらに松浦がイケメン俳優のY・Tに似ていると付け加え、沙雪に同意を求めた。

「んー、似てるかもね」

沙雪はできるだけさりげなく答えるのに骨を折った。

「Y・T？ それはちょっと褒めすぎじゃ」

芳樹は一瞬おおげさに顔をしかめてみせると笑った。笑うと眉がさがってますます童顔になる。それは彼の優しさを表すようだった。

「ね、やっぱり中学の頃からモテてたの？」

レイコの声に、思わず沙雪は耳をこらす。カラオケの中の会話はときどき聞き取りづらいから。

「んー」

芳樹は一瞬考え込んだ。

「モテてた……かな」

答える芳樹が微妙な表情を浮かべたことについて、このときは気付かなかった。

「かな、って何よ」

あいまいな返答にレイコが突っ込みを入れる。

「そだな。……モテてたよ」

「やっぱりねー。彼女とかいるんでしょ」

「さあ……、俺は知らない」

「いなかったらチャンスじゃん」

そういつてレイコは沙雪を振り返った。まさかそう来るとは思わなかった。沙雪の体は反射的に硬くなる。

「な、なんであたしのほうを見るのよ」

かろうじて言い返す。カラオケが暗くてよかった。明るかったら顔色ですべてバレているだろう。

「だってイケメンだし。モデルやってる沙雪と絶対お似合いだよ」

「それは、関係ないし」

沙雪はできるだけさりげなく　今度は、さも些細なことのように否定した。

「俺、知ってる。三次さん、こないだ雑誌の花火特集でモデルやってたんだよね」

香水の香りがふつと強くなった、と思ったら沙雪の隣にいたパツと見イケメンのコがいつのまにか話にわりこんできていた。

「えーモデルう！　三次さんモデルやってるの？」

芳樹の目と眉の間隔が広がった。

曲の切れ目だったせいかな、カラオケに興じていた連中の注目も集まる。

「や、叔母が編集やってるから。それで無理やりに……」

沙雪はあたふたと、言い訳じみた説明をしなくてはならなかった。

母の末の妹にあたる叔母の由利子は、地元タウン誌の編集部編集兼ライターとして出入りしていた。

沙雪はときどき、彼女に呼び出されて、あて名書きや電話確認などの手伝いにこき使われる。

まあ、その分お小遣いをくれるから、沙雪としても助かっていたのだが。

その花火特集のモデルも、そんなお手伝いの1つのようなものだった。

最初はちゃんとモデル事務所に頼んでいたらしいのだが、その本職のモデルのうちの一人にドタキャンされてしまったらしい。

『お願い。沙雪ちゃん！ バイト代出すから』

いきなり電話をかけてきた由利子に泣きそうな声で頼まれて、それで沙雪はしぶしぶ浴衣を持ってスタジオに向かったのだ。

「俺、俺、その雑誌見た。結構大きく載ってたよ」

タウン誌の花火特集だから、似たような花火の写真に開催日のリストという単調なレイアウトになる。

その誌面を少しでも賑やかにするためだろうか、さまざまポーズの沙雪ともう一人のモデルが切り抜きで散りばめられていて沙雪はかなり恥ずかしかった。

編集の人は、

『沙雪ちゃん、本職のモデルに登録すればいいのに』

なんて軽口をたたいたが校則ではバイトは原則禁止になっている。

それに経験上、目立つことに懲りている沙雪だから、できるだけ騒がれなくなかった。

そんな沙雪の気持ちも知らずに、隣の男　　たしか杉本といった  
はまだその話題を続けている。

へえ、すごいね、などといっている他の女子がしらけていないか、  
沙雪は恐れた。

「いや、本当にたいしたことないし。単なる読者モデルみたいなも  
んだから！」

沙雪はそういうと、トイレに立った。

少し席をはずせば話題は歌と一緒に流れていく。そんな計算から  
だ。

さすがの大音量の歌も、トイレに届くのはわずかだ。

そんな静けさの中で、沙雪は、しのびよる思い出に少しだけおび  
える。

中学の時に　　ほんの少しだけ　　ハブられたことがあった。

『ちよつときれいだからって、調子にのってる』

そんなつもりはまるでなかったのに。

たった一人で食べる給食。誰も仲間に入れてくれないバレーボール。

そんなに長い期間ではなかったけれど沙雪は十分に傷ついた。

あんな思いは、もうたくさん。

高校に上がった沙雪は、そういうことがないように極力気を使ってきたのだ……。

結局合コンは、沙雪にはなんの収穫もなかった。

気の合う何人かは、このあとカフェにいたりするみたいだったけれど、沙雪は帰ることにした。

「じゃ、あたしも一緒に帰る」

レイコがそういつてくれて沙雪は心からほっとした。

昼間は夏のように暑いのに秋の日は短い。もう西の空は赤く黄昏で、街にはとうに灯りがもっている。

自転車を押す腕のあたりに沙雪は秋の気配を感じた。

「サユ、杉本クンに気に入られてたね」

「そうかな」

どうでもいい、と沙雪は思う。

「付き合おうっていわれるかもよ」

「……」

おとついに比べるとそれほどでもないけれど、赤く焦がれるような秋の夕空に沙雪は目をあげる。

そんな美しい空をみてなぜか切なくなるのは、さっきまで隣にいた男のせいでは、決してない。

話題を変えようとしてレイコを振り返ったはずだった。

沙雪の視線は、ふいに何かの強い引力に引っ張られるように、流れた。

レイコも沙雪につられてそっちを見る。

かなり暗かったけれど沙雪にはすぐにわかった。

「デジャヴ」  
既視感のように。



沙雪が夕陽の中で見た彼

松浦峻がこちらへと歩いてくる。

## 5 一ヶ月で彼女を替える最低男 4

こちらへ歩いてくる松浦峻は、やはり沙雪に気づいていないようだった。

沙雪は思わず息をするのも忘れ……歩みを止め。

そして、大きく息をつく。落胆の吐息。

松浦は、同じ年ごろの女のコの肩を抱いていた。

「……彼女かな。スゴイ」

レイコが囁く。

何が『スゴイ』って。

松浦とその彼女が出てきたらしき路地のむこうには、ホテルがあったから。

ピンク色のネオンが、暗くなり始めた路地を隠微な色に染めている。

お互い私服だったからか、松浦は沙雪に気づかないようだった。

松浦は沙雪の知らない表情を浮かべて、沙雪の横を通り過ぎて行った。

沙雪が知っている松浦の表情は。

夕陽の色に染まった瞳と涙の筋を浮かべた哀しげな顔。

そして、心をどこかに置いてきたような、けだるい顔。

教室で、昨日も今日も。

松浦の顔は 誰に話しかけられてもどこかけだるそうな感じだった。

脱力感、のようなものが常に漂っていたのを、沙雪は目の端でとらえていた。

それが今は。

女の子の肩を抱いた松浦は軽く笑みを浮かべている。

その笑い方を、沙雪はなぜか嫌だと思った。

沙雪は二人が通り過ぎるまで、立ち止まったままだった。

夕風が半そでにしみて、ようやく我に返る。

レイコが不思議そうに見ているのに気づいて、沙雪は笑顔をつくる。

「……いこっか」

レイコの手前、何気なくふるまいながらも沙雪の心は動揺していた。

ばくばくとのたうちまわる心臓が、苦しい。

「あれが、アッコちゃんのいった彼女かな」

「……たぶんね」

さつき、レイコが3組の教室に遊びに来た時、松浦の話題が出た。

昨日から今日にかけて3組の女子で、松浦のうわさをしなかったコなど、たぶん一人もいないに違いない。

『松浦くん、あたしの中学のときの友達と、付き合ってるんだよ』

そのアッコの友達で女子学園に通っているコとは、夏休みに入ってから付き合いだしたばかりらしい。

おそらく 松浦とさつき寄り添っていたコはその子に違いない。

でも、それじゃない。

沙雪が苦しいのは、松浦が他の子と寄り添っていたからではない。

アッコが『松浦の彼女』の話をしたときも、沙雪は別に苦しくなかった。

むしろ、あれだけのルックスなら当然だと思った。

そのあとの、沙雪が思い出たくない話題が、記憶にからみついたようにつながってくる。

チャイムが鳴ってレイコが9組に帰った後も、噂話は先生が来るまでの間、続いていた。

そのときにアッコがさっきより声をひそめて耳元で囁いた。

『でもね。C女子の別の子によれば、松浦くんって有名なヤリxxらしいんだ』

『え？』

沙雪の目の端はあいかわらず、松浦を確認している。

松浦は脱力感を漂わせながら、頬づえをついて窓の外に視線を遊ばせていた。

『松浦くん、GWあけからほとんどこっちに帰ってきてたらいいんだけど……それがさ、彼女がころっころっ変わってるんだって』

ころっころっ、とりズムをつけて語ったアッコは、瞳を沙雪の方に寄せて、意味深に口角をあげる。

『それが、ヤツたら捨てるってパターン。1ヶ月で女を変える男で有名なんだって』

『なにそれ』

うそー、信じらんない。と話にノリながらも、沙雪は本当に信じられなかった。

沙雪の中にいる松浦は、あの夕陽の中の哀しげな涙。

ヤリ××だの、ヤツたら捨てるだの、生々しくて下劣な雄的行動オスと、あの夕陽にきらめていた涙は、沙雪の中でどうしても結び付かなかった。

それが、今。

裏付けられてしまったのだ。

「……いやらしい。サイテー」

思わずつぶやいてしまったのが、レイコに聞こえてしまったらしい。

「何が？」

レイコが不思議そうな顔をして沙雪を見た。

レイコは、あのあと9組に帰ってしまったから松浦の最低な風評を知らないのだ。

いつもなら面白おかしく、かつ詳細に噂を伝えて、一緒に

『信じられない!』

と叫ぶところだが、そんなことをする気も起きなかった。

そんなにまで落胆してしまった自分が、また何を期待していたのか、そんな自分が腹立たしいとさえ思う。

「……高校生のくせに。ホテルとか入ったりして」

沙雪はただそう答えた。

不思議そうに沙雪を見つめていたレイコの瞳が、少し涼しげに細まる。

「……ホテルはちょっとアレだけど、別にいやらしくはないんじゃない?」

意外な返答は、淡々と帰ってきた。

沙雪はレイコの顔に真意　たとえばキツイ冗談とか　を見ようと自転車を押す手を止めて目を凝らした。

そこにはなぜか、憐れみのようなものが浮かんでいる気がして、沙雪はあせる。

「つきあってたら、別に普通のことじゃない?」

レイコはもう一度言つと、自転車を押して先に進んだ。

レイコも、いつのまに。

いつのまにか、自分だけが取り残されていることに気づいた沙雪の行く先に、極彩色のネオンが小さくまたたいている。

「待つて。レイコ」

それはあの日の夕陽よりもけばけばしくて。

沙雪は苦い唾液を呑み込むと、下を向いて、自転車を押すのに集中した。



## 6 生まれて初めてのデート 1

だめだ。ぜんぜん楽しくない。

沙雪は隣にいる杉本に気づかれないようにそつとため息をついた。

スクリーンの中には、しばしば静かな夜が訪れて、闇が客席を飲み込む。

そのたびに沙雪の中では、警報が鳴り響くのだ。

もう少しで沙雪に寄りかかりそうなほど、肩を寄せてきている杉本。

彼の方をみなくても、体温と香水のにおいでわかる。

香水の匂いは、しばしば息をとめているうちに慣れて来たからまだいい（いやだけど）。

だけど、肩のあたりから放熱される体温は、沙雪の領空へ侵入してきそうで。

生々しい体温　沙雪はむしろそれを警戒した。

もしも、これが好きな二人なら。

迷わず肩を寄せ合っただろう。

現に、スクリーンが明るくなるとそういうカップルたちのシルエツトも浮かび上がる。

暗い映画館の中は、適度に人目を避けられるからだろう、大胆にくつつきあうカップルもいるほどだ。

沙雪は、といえば。

進んで肩を寄せ合うほど、隣にいる男子が好きなわけでもない。

『一緒に行動しているうちに、いいところが見つかることもあるし』  
誰かがいったように、今からこのコを好きになれるのだろうか。

いまの沙雪には、そんなこと考えられない。

そうかといって、あからさまに反対方向へと避けるのはあんまりな気がする……。

だから沙雪は、シートの中央にまっすぐに座り身を固くしていた。  
それはひどく疲れる。

案の定、映画の内容はまったく入ってこない。

やっぱり断ればよかった。

ついに沙雪の心ははつきりと後悔の形をとりはじめた。

うちでぐつ太とでも遊んでるほうがよっぽよかった。

寒いとき、ぐつ太を抱っこするとあったかい。

いきものの柔らかい感触。ぬくもり。

……冷房の効き過ぎた映画館、肌寒い沙雪は、今それがとても恋しい。

これが、生まれて初めてのデートか……。

沙雪はもう一度ため息をついた。

あの合コンの翌日。

沙雪は、隣にいた杉本という男子に試写会に誘われた。

「試写会の券をもらったんだ。よかったら行かない？」

男子クラスの杉本は、沙雪の所にわざわざやってきて誘ってくれたのだ。

さすがに学校では、あの香水の匂いはしなかった気がする。

「やっぱり！ やったじゃん」

レイコは沙雪の肩を叩いたが、沙雪はあんまり乗り気じゃなかった。

「杉本くん、まあまあイケてるし。気軽にいつてくればいいじゃん。タダだし」

アッコもそういつて、レイコと「ねー」と笑った。

「でもさ。あたし、男子と二人で『でーと』みたいの行ったことないんだよね」

だから、行きたくない、と沙雪は暗に言っただつもりだった。

それを聞いたアッコやクラスの子は驚いていた。

「えー、サユって、デートもまだなのぉ！」

「だつたら行つたほうがいいよ。気軽にさ」

沙雪が彼氏いない歴〃年齢だと知ったクラスの子は、寄ってきて  
我も我もとアドバイスを始める。

彼女たちのいうことはたぶん、もっともなんだろう、と沙雪も思う。

だけど沙雪は……気づかれないよう、ちらりと後ろに目を走らせた。

あいかわらず一番後ろの席に座ってぼんやりしているような松浦。

その姿を目の端に捉えたたん、昨日の姿を思い出す。

女の子と寄り添って、ピンク色の路地から出てきた姿。

いやらしい。あんな人関係ないじゃん。

そんな考えが浮かんだそのとき。

「松浦くん！」

後ろから男子の聲がした。

胸の中を見透かされた気がして、沙雪は思わずビクついた。だがすぐに

「あ、古田くんだ」

とレイコの聲がして反射的に後ろを振り返る。今度は目の端でなく、どうどうと。

昨日の合コンにもいた古田芳樹がバスケット部だろうかもう一人の男子と、後ろの戸口に立っていた。

それに気付いた松浦は、

「あ」

と表情を和らげると、のっそりと立ち上がった。

「ひさしぶりじゃん……」

などと話しているのが聞こえる。

そういえば昨日の合コンで、古田は松浦と同じ中学だったと言っていた。

あの二人は仲がよかったのだろうか。

キャプテンの古田がやってきたので、3組のバスケット部在籍の男子も加わり4人で立ち話になった。

「意外だねー。あまりしゃべらないと思ってたのに」

アッコがそつとつぶやく。

主語はないけれど、もちろん松浦のことだと沙雪にはわかる。

教室の中で、確かに違和感のあった松浦だが、こうやって4人でしゃべっている姿は、普通の男子高校生だ。

いつのまにか、松浦は笑顔になっていた。

冗談でも言い合っているのか、笑い声さえ聞こえる。

こんな顔もするんだ。

沙雪は意外だった。

その笑顔には……昨日の女の子に向けた笑顔のような嫌悪感を、沙雪は感じなかった。

いい顔だ、と思う。

夕陽の中の哀しげな顔はただ、美しかった。

だけど、今の顔のほうがずっといい。

「やっぱさ、こうしてみるとイケてるよね」

レイコさえ感嘆している。

「でも彼女いるしー」

アッコの声に、沙雪はドキッとして振り返った。

……彼女は、どうやらずっと沙雪の様子を見ていたようなのだ。

「杉本くんだって、まあまあじゃん。下級生にモテるよ」

アッコの声は沙雪に釘をさしているように思えた。

「一緒に行動しているうちに、いいところが見つかることもあるし」

「そうそう。デートだけで、付き合っただけでもないし」

まわり女子の声も沙雪に戻ってくる。

そんなわけで、沙雪は成り行き上、土曜日、杉本とデートするはめになってしまったのだ。

## 7 生まれて初めてのデート 2

「こんなところに来るの、はじめて」

沙雪はあたりをキョロキョロと見渡す。

7時前に映画が終わって、杉本は夕食に沙雪を誘った。

『美味しくて面白いお店のタダ券があるんだ』と杉本が誘ったその店はたしかに個性的だった。

暗い中にぼんやり浮かび上がる行燈と、それを反射する池。

建物の中にあるのに、その店のフロア全体が池になっていて、席へは飛び石を渡っていくのだ。

1つ1つが独立して池に浮かぶようになっていて、席は、紗のような薄い布で仕切られている。

そう、由利子のオフィスにあった雑誌で見た、リゾートホテルの天蓋つきベッドみたいな。

藤とオフホワイトの帆布で作られたソファーになっている席も、いかにもそれっぽい。

それは周囲の視線から席の中をほどよく遮っていて……気付くとうやら他の席はカップルばかりのようだった。

どうやら南の島にある、海の上に浮かぶコテージを意識した店のつ



くり……もちろん高校生の沙雪にはそんなことまでわかるはずない。

ただ、周囲の視線から遮断された沙雪は、再び緊張に身を固くした。

杉本はといえば、

「何にしようか」

と1つしかないメニューをいいことに体を寄せてくる。

この場に焚かれているお香に杉本のつけている香水がまじる。

そのうち慣れるかと思ったけれど、やっぱり無理かも。

沙雪は心の中でそっとため息をつく。

そもそも、映画だけ見たら、帰るつもりだった。

それが、夕食に付き合ってしまったのは。

もちろん『タダ券があるんだ。付き合ってくれない?』と頼まれたというのもあるけれど。

よく冷房が効いた映画館はかなり寒かった。

身を固くしながら沙雪は、知らず知らずのうちに自らの腕を抱くようにしていたらしい。

鳥肌がたっているのが自分でもわかる。

映画の半ばで、それに気付いた杉本は、

『ひよっとして寒い?』

と小声で訊いてきた。沙雪は

『大丈夫』

と答えたのだが、杉本は着ていたパーカーをおもむろに脱ぐと

『これ、肩にかけとけば』

と差し出した。

『え、いいよ』

沙雪は遠慮したが、杉本は『いいって』と笑顔で、有無を言わずにそれを沙雪の膝の上に乘せた。

膝の上のパーカーには杉本のぬくもりがほんのり残っていて……沙雪は戸惑う。

拒否したい気持ちよりも。

優しいところもあるんだな。

パーカーに残るぬくもりは、沙雪を少しだけ温かい気持ちにさせた。そして思い出す。あれはサッカー部だっただろうか。

高1の時、同じクラスにマネージャーをやっていたコがいた。

冬になると彼女は、先輩から借りたんであろうジャージをいつも制服の上から羽織って練習につきあっていた。

そのコはたぶん、その先輩が好きだったんだと思う。

彼の服を羽織るのは、その人の優しさに包まれているような気がしたんだろっな、と沙雪は想像する。

そんなふうに杉本の優しさにくるまりたいわけでは、今の段階ではない。

だけど、差し出された優しさは、確かに沙雪を温かい気持ちにさせた。

そしてクラスメートの言葉が心に再び浮かび上がる。

『一緒に行動しているうちに、いいところが見つかることもあるし』  
そうだ。

もう少し一緒にいたら、もっといいところが見つかるかもしれない  
誘われたとき、沙雪はそう思ったのだ。

もうすぐ17才になるのに、彼氏がない沙雪。

それに対して、周りにはみんなどんどん大人になっていく。

いろいろなことを知っていく。

そんな状況への焦りもあったのだけれど。

だけど、再び沙雪は後悔している。

運ばれてきた料理は、沙雪が食べたこともない趣向がこらされたものばかりで……杉本に連れてこられなければ絶対に食べられないようなものばかりだった。

味も、ときどき『狙い過ぎ』な傾向こそあったものの、そこそこ美味しい。

だけど……。

「三次さんさ、ずっとモデルとかやってるの?」

「また出たらいいのに」

「あの本出てから、モテたでしょ?」

……それを話題にすれば沙雪が喜ぶと誤解しているのだろうか。

杉本が話題にするのはそのことばかりで沙雪は閉口した。

それに、こうやって一緒に食事をしてみてわかったのだが……杉本の食べ方はあまりきれいではなかった。

歯並びが悪いのも気になってくる。

こんな風に欠点ばかり気になりはじめるのは、やはり好きになれないのだろう。

失望した沙雪の前では、リゾートのようなインテリアも、凝った料理もただ味気ないだけだ。

「モテないよ、別に」

「いや、モテてるって。みんなウワサしてるし。三次さんのこと」

杉本がいるのは男子クラスだろう。

普通に聞けばちょっと嬉しいようなことのはずなのに、沙雪はちょっと胸やけがするような気がした。

杉本はチューハイを飲んでいるせいかよくしゃべる。

車で来ているかどうかはチェックされても、店の人もいちいち高校生とはチェックしないのだ。

沙雪も迷っているうちに『美味しいよ』と同じものをオーダーされてしまった。

それはたしかに口当たりがよくて、ジュースみたいだった。

やるせない時間をやり過ぎすべく、沙雪はそれを口にするしかない。

「……それにしても、三次さんと二人でデートできてよかった」

食事をだいたい食べてしまった頃合いに、杉本はつぶやいた。

そしておもむろに沙雪のほうを振り返る。

ドラマの二枚目を意識したような仕草。

頬が少し赤くなっているのが似合わない。様になってない。

無理もない。杉本はチューハイを2回おかわりしていたから。

その芝居じみた様子がやりきれなくて、沙雪はチューハイを手にする。

沙雪の方も2杯目が終わるところだ。

なんとなく、頭の中に霞がかかっているような、空気が重くなったようなけだるさの中で、これを飲んだら帰りを切り出そうと思っている。

「ねえ。三次さん。修学旅行、誰も相手いないんでしょ」

杉本が膝を進めてきたので、思わず沙雪はたじろぐ。

彼の体は少し揺れている。酔っているのだろうか。

たじろいた沙雪も、ぐらつく感じを覚える。

「俺じゃだめ？」

やや焦点があわなくなった瞳が今までの誰よりも近くで沙雪に注がれる。

沙雪は本能的にのけぞるようにして、距離を保とうとした。

そのたびに、ぐらりぐらりと体を置いて、頭だけが2倍も動いたような錯覚を覚える。

杉本が、それなりに自分を真面目に好きでいてくれるのはわかる。

でもやっぱりダメ。

だけど、そのまま『ダメ』と言いきってしまうほどの非情さを沙雪は持てない。

どう答えていいか迷いながら、沙雪はうなづく。

「うめ……」

沙雪がいい終わらないうちに、

「なーんでー！」

といきなり杉本が大きな声を出したので、沙雪はビクッと震える。

「なんでー！ いいじゃん。彼氏いないんですよ！」

あいかわらず向けられた杉本の充血した眼には、非論理的な怒りが燃えている。

いくら、男子と付き合ったことのない沙雪でも、この状況がヤバイことはわかる。

「ごめん。あたし、この辺で帰るね」

唐突に立ち上がった沙雪だが、腕を引つ張られる。

すごい力……というより、酔ってぐらついていた沙雪は簡単にバランスを崩し、ソファに倒れるように落ちた。

「三次さん。俺、マジで好きなんだ」

それでも、バネのように身を起した沙雪の肩を、杉本はガシッと掴んだ。

「……やつ。やめて」

沙雪は抵抗したが、杉本は沙雪をソファの背に押し付けると顔を近づけてきた。

たぶん、完全に酔っているのだろう。

ニキビの跡がある赤い頬、充血した瞳、そして分厚い唇がどんどん近寄ってくる。



香水の匂い　いや、違う。

さっき映画館で羽織ったパーカーの香水の匂いは、そんなに嫌なにおいじゃなかった。

香水と、杉本自身の体臭がまじった匂い。

今わかった。沙雪が嫌だったのは、その匂いだった。

そしてさらに。

アルコール臭い、生温かい息が鼻先に吹きかかる。

「いや！　やだー！」

沙雪は大声をあげて、顔をそむける。

## 8 生まれて初めてのデート 3

すごい力。

肩をソファーに押し付けられた沙雪は、身動きすらできない。

せめて顔をそむけるだけ……それがせいっぱいの抵抗だった。

「やつ……」

そむけた頬に感じた、アルコールの臭いがまじった湿った息。沙雪は思わず目を閉じた。

次の瞬間を、悪夢だと思ったかった。

そむけた唇の横のほうからくつついた柔らかいもの。

ぶにゅつとした、生温かい肉の感触。

不快さに思わず目をあける。

杉本の顔のドアップ。

あまりに近すぎて、妖怪じみて見える顔。

焦点をあわせられるギリギリの距離で赤っぱいニキビ肌を確認したとたん、ふいに。

その顔が不自然なスピードで視界から消えた。まるで弾かれるよう

に。

「お客さん。困ります」

押さえつけられていた体が軽くなり……低い声に降り返った沙雪が見たのは、背の高いホールスタッフに後ろから襟首を掴まれた杉本の姿だった。

どうやらこのスタッフが、沙雪から杉本を無理やり引きはがしてくれたらしい。

「……離せよッ！」

暴れようとする杉本を、スタッフは掴んだ襟首ごと放り出すようにした。

テーブル上のグラスをなぎ倒しながら……杉本が床に投げ出される。

ウッドデッキの床が派手な音をたて、池の上に反響した。

天蓋風の薄い布に包まれた、それぞれの席の客も、何事、と様子をうかがっているのがわかる。

「店内でのトラブルは困ります」

「……つてえ。何すんだよ！……あっ」

杉本がそのスタッフの顔に気付いたのと、沙雪が気付いたのとほぼ同時だった。

うそ。

それは松浦峻だった。

間違いない。

暗かったけれど。

また、立て襟のシャツに黒く長いエプロンをつけたギャルソン風の姿だったけれど。

……見間違うはずがない。

「おまえっ……！ 3組の松浦だな」

松浦は冷やかな眼で杉本を上から一瞥すると、倒れている彼の腕を引っ張り上げようとした。

杉本はそれをはねのけると、バネの様に飛び起きた。

「覚えてろよ！」

杉本は吠えると、ふらつきながらも飛び石を渡って立ち去ってしまった。

沙雪はただ放心したまま それを見送る松浦の斜め45度の顔を眺めていた。

と。

松浦がこちらを振り返った。

恐怖のあまり動悸さえ忘れていた胸が……今頃になって激しく打ち始める。

「……大丈夫ですか」

何と答えたらいいかわからないけれど。

その丁寧話が、クラスメートに使われるべき言葉ではなく。

店のスタッフからお客に対して使われる言葉づかいであることはわかる。

もしかして松浦は、同じクラスの沙雪のことなど覚えてもいないのだろうか。

その整った顔を見上げながら……沙雪はとりあえずうなづいた。

やはり、松浦に間違いない。

松浦がやってきてから、この1週間。

一度も言葉を交わさなかったけれど……沙雪は気がつけば松浦を見ていたから。

嫌らしい、とあのピンク色のネオンを思い出しながらも、気がつく  
と視線が吸い寄せられている。

ひんぱんに遊びに来るようになった古田がいるとき以外の松浦は。

たいていぼんやり頼杖について、窓の外に顔を向けていた。

その斜め45度の横顔はどこか寂しそうで。

そう、最近現国の教科書の一文に出てきた『寂寞感』のようなものが漂っていた。

いや、それは。

古田らと笑っている時も、常に漂っている気がしたのだ。

だけど。

あんまりしょっちゅう見ているせいか、沙雪と松浦の視線はしばしばぶつかった。

そのたびに沙雪は……松浦ではなく、松浦の向こうにある窓の外を見ているようなふりをしてやりすごしているのだけれど。

このところ日に3回は必ず、目が合っていたのに。

それに、古田だって松浦の横から「三次さん、元気？」と声をかけてくることがあったのに。

松浦は沙雪に気づいていないのだろうか。

松浦は、テーブルの上で倒れたグラスを元に戻しながら、紙ナプキンを何枚か手に取ると、ふいにそれを沙雪の目の前に差し出した。

それが何の意味かわからずに、沙雪は松浦を見つめるしかない。

「……顔」

「あ……」

松浦の低い声で……沙雪は、自分の顔が涙でぐしゃぐしゃだということに気付いた。

「すみません」

自分のことを覚えているかどうかはおいといて。

松浦が店員としてふるまっているなら、沙雪も客としてふるまうべきなのだろう。

沙雪はそういつて紙ナプキンを受け取ると、涙をぬぐった。

知らない間に鼻水まで垂れていたらしい。

恥ずかしい。

沙雪はめだたないように鼻をすすった。

「……三次さんも、もう帰ったら？」

え。

沙雪は鼻をすするのをやめて、再び松浦を見上げた。



## 9 生まれて初めてのデート 4

果たしかに、『三次さん』って……。

松浦は確かに言った。

やっぱり松浦は、沙雪を沙雪として認識していたのだろうか。

あまりに意外で　せつかく涙をぬぐったのに、目を見開いた拍子に溜まった涙がまた、ぼろぼろとこぼれおちてしまった。

それを目にした松浦は、うんざりしたように

「だいたいさ」

とため息ごと吐き出すように口にした。

「自分が悪いってわかってんの？」

え？

湿って丸まったナプキンで止まらない涙をぬぐっていた沙雪の手が止まる。

どうして、自分が責められないといけないのか、わからなくて。

松浦はそんな沙雪のことなどがまわすに、テーブルの上を片づけ始めた。

また涙が出てきたせいか、また鼻水が垂れてきて……沙雪は頭の中に湧き出す疑問ごとそれをすすった。

なんで。

どうして自分が悪いなんていわれないといけないのか。

だいたい、沙雪は被害者なのに。

いきなり押さえつけられてキスされて。

思い出すと怖くて涙が出てくる。

涙とともに鼻水も湧いてきて……沙雪はぐしゅん、という音を繰り返すしかない。

テーブルを片づける松浦の頭が、少しだけ落ちた。

ため息。そして振り返る。

「……こんなところに来ること自体、スキだらけじゃん」

整った顔が、心底面倒くさそうに歪んでいる。

だって、だって。

だって知らなかったんだもん。

知らずにつれてこられたんだもん……。

心で反論しながらも、沙雪は文句がいない。

あまりにも、もつとも。正論だということはわかっているのに。涙が止まらない。

もらった紙ナプキンはぐしょぐしょで、もう役に立たない。

沙雪は涙を手でぬぐった。

松浦は、トレーの上に皿やグラスを載せながら続ける。

「……男に期待だけさせといて、あげくギヤーギヤーわめいて。みつともね」

もつともだけど……沙雪は泣きながらだんだん腹が立ってきた。

一度も口をきいたことのない転校生に、なんでここまで言われないといけないのか。

腹がたつのに、涙が止まらない。

全部トレーに載せ終わったのか、松浦は再び振り返った。

今度はちよつとバカにしたような視線を放り投げてくる。

「……だいたい、キスくらいで。そんなに泣くようなこと？ 減るもんじゃなし」

そうだ。

思い出させないでよ。沙雪は鼻水ごと涙をぐいっとぬぐった。

はじめての……キス、だったんだ。

あれが。

あんなやつと。

「減るよ！」

沙雪は叫んだ。

一生に一度っきりの、ファーストキス……。

あんな形で失ってしまった。

沙雪のあまりの剣幕に驚いたのか、松浦の顔から非難も軽蔑も消えている。

ただ見開いた瞳の中で、テーブル上のキャンドルだけが揺れていた。

それを見ていると、また新しい涙が湧き出てきた。

「帰る！」

いきおいよく立ちあがったつもりだったけれど、体がぐらついて。

まっすぐ歩こうとして……カーテンのようになった入口にぶつかる。

頭がフラフラしてうまくバランスがとれない。

それでもかまわない。

沙雪は天蓋に覆われたような席を飛び出した。

席を飛び出して、ここが池の上に浮かぶ席だったことを思い出す。

「おい！」

飛び石に足を踏み出そうとした沙雪は後ろから肩をガシッとつかまれた。松浦が追ってきたのだ。

「ほつといてよ！」

かまわず振りほどこうとした沙雪だったが、

「池に落ちるぞ」

と聞いて黙った。

視界がグラグラ揺れて、水面に映る行灯が二重にも三重にも見える。

酔っていなければどうということのない飛び石なのに。

松浦の言う通り、支えてもらわないといまにもバランスが崩れそうなのだ。

沙雪は自分が情けないと思った。

飛び石を渡ると松浦は、沙雪に

「ここで待つてろ」

と池のほとりにあるウッドテラスの席の1つに腰かけさせた。

松浦がカウンターの中の人と話しているのが 休憩、とか繰り上げ、とかいう単語が聞こえてきた。

沙雪はテーブルの上に頬杖をつく、建物の中の池を眺めた。

ここから見ると、天蓋に覆われたような席は、池の上にいくつも浮かぶ大きな丸いドームのようで幻想的だった。

その中では、キャンドルの暗い明りに照らされて、恋人たちの影が揺れている。

沙雪は頬杖をつきなおした 掌に唇が触れる。

どうしても思い出してしまう。

あんなやつに。

沙雪は唇を手の甲でゴシゴシとぬぐった。

はじめての……キス、だったのに。

いちおうデートだから、とつけてきたルージュもグロスもすっかりとれてしまっている。

だけど沙雪はこすり続けた。

ひりひりしてくる。

最低。最低。最低。

ひりひりしているのは唇よりも……。

涙がまた出てくる。

「まだ泣いてんの？」

気がつくとも松浦が立っていた。さもウザそうな顔。

エプロンと蝶ネクタイをはずし、シャツをパンツから出して……休憩モードらしい。

「ほら、行くぞ」

どうやら、松浦は沙雪を送ってくれるらしい。だけど。

なんでこんな口の利き方されないといけないの。

「もういいよ。一人で帰れる」

沙雪は手の甲で涙をぬぐうと、負けずににらみ返してやった。

「じゃ、立てよ」

ほれ、立てないだろ。と続きそうな口調。沙雪は挑むように立った。

さっきよりはマシだけど、まだ体の動きに頭の揺れがワンテンポずれたような感じは続いている。

「行くぞ」

沙雪がどうにか立てるのを見届けると、松浦は顎で出口をしゃくった。

操られているみたいで腹が立ったけれど、これ以上ウザく思われるのはもっと腹立たしい。

松浦の後をついていって……沙雪はこの店が地下にあったことを思い出した。

それほど酔ってるんだ、と自覚する。

外に出るとネオンがまぶしいほどだった。

そのピンク色の光が、なんか不快なものを呼び覚ましそうで。

沙雪は口を尖らせながら、前にある松浦の広い背中から目をそらした。

と、その松浦は振り返った。



「家、M浜のほうだろ」

その口調があまりにもぶっきらぼうだったから、沙雪は首をブンブン振る。

「違う。J町だもん」

あんまり首を振ったので、脳がシェイクされてクワンクワンと音を立てそう。

そんな中で、沙雪は考える。

M浜。それは、ぐう太のお気に入りの散歩コース。

つまり、夏休み最後の日に、はじめて松浦に出会ったあたり。

やっぱり。

この男も、あの日のことを覚えているんじゃないか。

沙雪はぶんぶくれたまま顔をあげた。

しかし松浦はそんな沙雪の様子にはまるでおかまいなしに

「そ。どっちにしても、その酔っ払いじゃタク（タクシー）だろ」

と、なかばバカにしたように、タクシーが拾える通りへとさっさと歩いていく。

「まだ、地下鉄あるもん！ もう一人で大丈夫だから！」

沙雪はムキになって立ち止まる。

振り返った松浦は、斜に構えるようにして沙雪を見下ろした。

さっきも思ったけれど。こうしてみるとずいぶん背が高い。

沙雪も女子では高いほうなのに、見上げるようだ。

「土曜日の夜、女子コーコーサーがその酔い方で独り歩き。ナンパしてくれていってるとようなもんだな」

「……大丈夫、だもん」

「ふーん……」

言ってるそばから、後ろからズンズンと胃を振動させながら重低音の塊が近寄ってくる。

沙雪と松浦の横を、ピンクや青のライトでバンパーの下を照らしながらワンボックスカーが通り過ぎていった。

「……キス以上のことされても、俺の責任じゃないから」

松浦は薄く笑うと、じゃ、と踵を返した。

むこうから酔っ払った大学生だろうか、肩を組みながらの一群が歩いてくる。

真ん中の奴が、動物園のライオンより大きな声で吠えている。

怒っているのか、気持ちがいいのかわからないような赤い顔。

沙雪はそつちをみないよううつむいた。

たまにみんなで来る繁華街。カラオケとか。

だけど、こんな夜にたった一人で、取り残されたことはない。  
。

沙雪は急に恐ろしくなった。

「待つて！」

本能的に、松浦を呼びとめていた。

## 10 処分

月曜日。

沙雪は朝補習をさぼってしまった。

登校するなり 沙雪は教室に松浦を探してしまう。

来てない。

わかっていたけれど、沙雪は少し力が抜けた。

進学校であるJ高校は毎朝補習が行われる。

補習と言いつつ全員必修の授業扱いであるけれど。

先週水曜からさっそく始まった2学期の補習だが、松浦はさぼって一度も来なかった。……転校生のくせに。

それどころか、朝のHRすらも、ギリギリにしか来ないという堂々たる態度なのだ。

「おはよー、サユ」

「土曜日どうだった？ 初デート」

席に着いた沙雪に、アッコたちが身を乗り出してくる。

土曜日のデートの顛末は……心配してメールしてきたレイコにしか

話してない。

でも、そのレイコにも杉本に『はじめてのキス』を奪われてしまった件については、話せなかった……。

あんなやつに、生まれて初めてのキスを。

好きでもないのに……。

思い出したくもないのに、思い出してしまう。

思い出すと悔しさで奥歯に力が入り……上下の唇がひきつりそうになる。

そのひきつった自らの唇の弾力ですら、嫌だ。嫌だ。嫌だ。

沙雪は唾とともに嫌悪感を飲み込むと

「……うん。こんなもんかな、ってかんじ」

とそっけなく答えた。

あれさえなければ、そんな感想で終わっただけなのに、初デート。

「それより今日一限目の英語、あたるかな。あたし、なんにもやってない……」

と明るく話をそらす。

これ以上、思い出したくないから。

松浦は、まだ来るようすはない。

沙雪は、アッコに英語を写させてもらいながらも、開け放たれた廊下の窓を目の端で意識する。

だけど。

そこに松浦が現れたとして。

何といえいいのだろう。

とにかく謝らなくちゃ……いや、お礼をいわなくてはならないことはわかる。

助けてくれたことと。

（結果的にキスはされてしまったが……）

それから、あのあと。

わざわざ地下鉄の駅まで送ってくれたのに。

沙雪ときたら、ありがとう、の一言も言わなかったのだ。

それにようやく気づいたのは、翌朝、ずいぶん陽が高くなってからだ。

あの翌日、つまり日曜日、沙雪は昼近くに目が覚めた。

少しだるいのは、二日酔いというやつだろうか　カーテンから透ける太陽は、前日の記憶から感情的な部分を薄めて……冷静に思い出させた。

『待つて。……駅まで送つて』

沙雪の嘆願に、松浦は無言で応じてくれた。

ただ、目だけで『ほら、やっぱり』と一瞬笑った気がした。

馬鹿にされたようにも、優しいようにも見えた瞳は一瞬だった。

松浦は背を向けるとすぐに沙雪の前を歩きだした。

それは結構早足だったから、沙雪は必死でついていかなくてはならなかった。

駅までの松浦は無言だった。

いや、たった一言。

『気をつけるよ』

ポケットに手をつ突っ込んだまま、放り投げるように言った、ぶつきらばつな一言。

考えてみたら。

彼がそれを言ったのは、改札のところだった。

つまり、改札まで一緒にいてくれたのだ……。

それに対して、何て答えただろうか。

まったく思い出せない。

もしかして、うなづいただけかもしれない。

わざわざ、休憩時間を使って駅まで送ってくれたのに。

あのときに、『ありがとう』と言っべきだった……。

思い出してしまうと。

恥ずかしさと、後悔と。

一気に溶け出してくる気持ちに耐え切れず、沙雪は再び夏布団の中にもぞもぞともぐりこんだ。

バカ。バカ。バカ。

このまま地底の底にもぐりこんでしまいたい。

布団の奥深くにうずくまった沙雪の耳に、キュウン、と声がした。

布団にトンネルのような隙間を作って外をのぞく。



すると、ちょうどそこに、ぐう太の切ない目があった。

ベッドの端に足をかけるようにして、こちらをのぞいているらしい。

「ぐう太、おいで」

沙雪は手を伸ばすと、ぐう太を抱き上げベッドに載せた。

なぐさめてほしかったのだ。

だが、すぐにぐう太はベッドを飛び降りてしまった。

「ぐう太あ、なあにい？」

仕方なく身を起こした沙雪に、ぐう太はすかさずリードを咥えて持ってきた。

目がキラキラしている。

「散歩？」

沙雪は伸びをした。今日もいい天気らしい。

カーテン越しに見える陽は高いものの　夏の盛りよりはその位置は低くなっているらしい。

季節は確実に秋に向かっているのだ。

海水浴客がいなくなったM浜を散歩したら、気持ちいいだろう  
と思いだして、沙雪は布団を再び抱きしめる。

『家、M浜のほうだろ』

昨日の松浦の声と。あの、夏休み最後の日の防波堤の夕陽が、鮮やかに蘇る。

松浦のヤツ。

覚えてたクセに……無視してたんだ。

そんな風に思いだすと、胸が苦しくなる。

そのくせ、甘酸っぱい切なさ胸から喉を超えて瞳の奥にまでこみあげてくる。

ぐう太はそんな沙雪の心中を知らずに、リードを咥えたまま、しつぽをパタパタ振っている。

早く行こう、と催促しているのだ。

「……今日は駄目。お父さんと行きなさい」

沙雪はそついうとまた布団にもぐりこんだ。

でも。

わざわざ、助けてくれた。

駅まで、送ってくれたんだ。

思い出すと体中の細胞がきゅっと縮むのがわかる。

その1つ1つが……いっせいに吐き出した気体が肺に充満したように……苦しくて。

沙雪はそつと溜息をつく。

チャイムが鳴り、同時に先生が入ってきた。

朝のHRだ。

てんでにしゃべっていた皆はあわてて席に戻った。

英語の教科書から顔をあげた沙雪は、廊下を松浦が走ってくるのをいち早く見つけた。

さすがに今日はゆっくりしすぎたのだろうか。

一足、とはいえ先生より遅いのははじめてだ。

後ろの引き戸めがけて廊下を走る松浦と、ふいに目が合った。

視線がピン、と張りつめて、沙雪の息が止まる。

しかし、それはほんの一瞬だった。

松浦は、特に表情を変えずに通り過ぎると、引き戸を開けた。  
と、そのとき。

「松浦」

先生が、呼び止めた。

松浦は教室の後ろで立ち止まっているらしい。

沙雪は他の者のように興味本位で振り返ることができない。

「これが終わったら、職員室に来なさい」

「……ハイ」

松浦の返事、そして椅子を引く音。

沙雪は息をこらして、背中で聞きとっていた。

まもなく朝のHRは終わり、松浦は先生に言われたとおり素直に出て行った。

「なんだろうねー。朝から呼び出しって」

「補習来ないから注意されるんじゃない？」

沙雪は松浦の背中を見送りながら、アッコたちが噂するのを聞いて

いた。

しかし……それきり、1時限目がはじまっても、松浦は教室に戻ってこなかった。

## 11 処分 2

お弁当を食べた後、レイコが9組からわざわざ来てくれた。

本当は、学食で落ち合ってもよかったんだけど、あそこには杉本が来るかもしれない。

彼と顔をあわせる勇氣は、まだない。

「なに、まだ落ち込んでるん？」

と紙パックに入ったアップルジュースを『おごりだよん』と言いなから差し出してくれた。

沙雪はそれを受け取りながら、あいまいにうなづいた。

レイコはつかない沙雪を、あのデートの後遺症と勘違いしている。

本当は、違う。

沙雪の表情を重いものになっている犯人は、後ろの窓際の空席。

松浦は、3時限が終わって、昼休みになっても戻ってこなかった。

クラスメートたち      ことに女子      も気になるらしい。

「どうしたんだろうね」

というささやきがいつも教室のどこかで聞こえるようだった。

と。

「あれー、古田。どしたの？」

レイコが戸口に向かって声をあげた。

つられて顔をあげた沙雪は、やや険しい顔の古田と目があつた。

古田と、バスケット部だろうか、背の高い男子がもう一人、引き戸のところに立っていた。

「三次さん、ちょっといい？」

声は優しいけれど、断れない雰囲気。

教室の外へと促す所を見ると、おそらく人に聞かれたくない話。

杉本のことだろうか。抗えない雰囲気には沙雪は立ち上がりながらも身を固くする。

と。そのとき。

沙雪とすれ違うように、クラスの男子二人があわただしく入ってきた。

「大変、大変だ！」

「松浦くん、学校謹慎くらってるんだとよ！」

男子の声は、まるで教室中の皆に聞かせるような大声だった。

ちなみに学校謹慎とは、学校に登校しつつも、生徒指導室などで一日中隔離されて自習するという停学の一步前の処分である。

「朝から生徒指導室だった」

「えー？ 何やらかしたの？」

男子のまわりに皆がわらわらと集まってくる。

ここは進学校だけあって『謹慎処分』などという単語を聞くことはめったにない。

それだけにクラスの皆は興味津々なのだ。

「なんかー、無断でバイトしてたのがばれたらしい」

「ええー！バイト」

「なんでばれたんだろうね」

突っ立っていた沙雪は、それを聞いてまさかと思った。

古田を振り返る。

案の定 古田は、沙雪をつながした。



「きくけどさ」

古田は切り出した。

古田ともう一人　きくとバスケット部の副キャプテンだという。合コンには来てなかった人だ　は沙雪を屋上に続く階段の入口に連れ出した。

屋上は施錠されているから、ほとんど誰も来ない。

つまり静かに話ができるというわけだ。

古田の様子が　視線は厳しいけれど、声はあくまでも気を遣ってくれている感じなのと、心配したレイコが付き添ってくれたから、ここまで付いてきた沙雪である。

だけど、こんな緊迫した状況はじめてだ。

何を問いただされるのだろうか。

「……松浦クンのバイト、先生に話したの、三次さんじゃないよね」  
どうして。

反射的に首を横に振る。

と同時に、わかったことがある。

松浦がバイトをしていることを、学校に誰かがチクった。

そして、沙雪が松浦がバイトしている店に行ったことを、古田は知っている。

もちろん沙雪でも。

校則でバイトが禁止されているのは、知っている。

だけど、チクるなんて考える以前に、あのときはバイトをしている松浦と、校則とを照らし合わせる余裕なんかもなかった……。

「違う」

言葉がやっと出てきた。声がかすれているのがわかる。

自分じゃない。

自分が松浦をチクるわけがない。

松浦に助けてもらったのに、どうしてそんなことをするだろうか……。

沙雪は必死に首を振った。

古田は　沙雪の答えの内容よりも、あきらかにその態度を見ていたようだった。

視線が一気に柔らかくなると、深くうなづいた。

「やっぱりそうか、そうだよね」

やっぱり？

つまり、最初から沙雪がチクったとは思われていなかったんだろうか。

……それにしてもどうして、沙雪が松浦の店にいったことを、古田が知っているのだろう。

「やっぱり、杉本だろ」

副キャプテンが古田にささやく。

やっぱり、ということとは。

沙雪と杉本が土曜日にデートしたことを知っている？

杉本はもしかして、バスケット部のメンバーに沙雪とのデートのことを逐一話したのではないだろうか。

なぜか自慢げに話している様子が頭に浮かんだ。

もしかして、キスのこともすっかり話してしまったんだろうか。

湧きだしてきた嫌なフラッシュバックに、沙雪は胸がつまるのを覚えた。

「ねーねー。てかなんでそもそも、サユがチクったなんていうの？」

ついにレイコが声にする。まさに助け舟だ。

古田は眉毛を下げて、申し訳なさそうな顔になった。

「いや……さ、土曜日に店に三次さんが来たって、松浦クンが言ってたから」

古田と松浦は、思ったよりずっと仲がいいらしい。

休みだった昨日も連絡をとりあうほど。

それより……松浦が自分の話をした。

そんな些細なことに沙雪の心臓は存在を主張し始める。

それが本題じゃないのに。

松浦の口が、沙雪を語った。

どんなふうに。

沙雪の胸はさつきとは逆の理由で、苦しくなっている。

「でもさー。松浦クンの店には、サユと一緒に杉本も行っただけだよ。チクったのは杉本できまりじゃん」

レイコはずけずけと犯人を名指しした。

「うん……たぶん、そうなんだろうけど」

古田は言いよんだ。

杉本が松浦のバイトをチクったとすれば、あのとき邪魔されたことの仕返しだろうか……。

「……あの。松浦くんはどれくらい謹慎になるの？」

しばらくの沈黙のあと、沙雪は思い切って聞いてみた。

今回、松浦が学校謹慎処分をくらった原因の、半分くらいは自分のせい。

沙雪にはわかっていた。

だって、沙雪のことで杉本に恨みをかわなかったら、こんな風にチクられることはなかったのだから。

「んー。普通だったら1週間学校謹慎＋放課後1時間草むしり1カ月、あたりだと思うけど……」

でも、転校してきたばかりだから、校則よくわかってなかったって言い訳できるかもしれない、と古田は答えた。

しかしすぐに「あ、でも」と向き直る。

「ごめんね。疑って。……松浦くんが捕まったのは三次さんのせいじゃないのはわかったから、気にしないで」

そんな風にあわててフォローを入れるところを見ると、沙雪はすっかり泣きそうな顔を見せていたのかもしれない。

無防備な自分を見せていたことに気づいた沙雪はあわてて下を向いた。

そんな沙雪に、さらに古田は付け足した。

「……それにあいつ、三次さんが店に来たこと話してるとき、なんか楽しそうだったし」

しかし、松浦の処分内容は、古田の樂觀をはずれた。

今までの前例どおりに　つまり学校謹慎1週間と、放課後の草むしり1カ月に決定したのだった。

## 12 処分 3

学校のはずれにある図書室の窓からは裏庭が見える。

庭というよりは敷地の隙間、といったほうがいいような狭い幅。

威勢の良い運動部の掛け声も、色づき始めた午後の光も届かないひっそりとした暗い地面の上に、松浦はしゃがんで草をむしっていた。

年中湿って固い土に生える草は、これまた根が深いらしい。あまり1か所から動かない。

一心に根を掘り起こしているのだろうか。

松浦のように……手足の長いイケメンが土掘りしているのは、本当に似合わなくて。

それはとてもみじめな姿に見えた。

自分のせい。

最初の日。

偶然その日の放課後にあった図書委員会の都合で 図書室の窓から彼を見つけた沙雪は胸が痛んだ。

以来、今日も沙雪は 罪の意識から図書室に来て、彼の背中を見下ろしていた。

図書委員の今週の当番を引き受けたのはそのためだ。

沙雪は上のほうの……年に一人も読まないような本にハタキをかけながら、目の端で背中を丸めている松浦を追っていた。

松浦はしごく真面目に草を抜いているようだった。

他にやることもないような裏庭だから仕方がない。

普通だったら中庭の雑草むしりをさせられるところを裏庭にされているのは、彼が目立ちすぎるといふ先生の配慮だろう。

しかし昨日まで、その配慮はあまり意味をなしていないようだった。

松浦が学校謹慎と放課後の草むしりを命じられて3日間。

先生の目を盗むようにして、草を抜く松浦の元へは女子がやってきた。

あまり長い時間いると先生に見つかって怒られるから、少し言葉を交わして去っていくだけのようだったが、それにしても入れかわり立ち替わり、さまざまな女子が彼の元をこっそりと訪れてきた。

3〜4人でつるんで現れて、彼が目あげたとたんにキヤーキヤーと去っていく1年。

建物の壁に寄りかかるようにして、大胆にも 十分ほど会話を交わしていく3年。

ランニング途中だろうか、部活中のジャージ姿の女子。



そしてアツコら、クラスの女子。

数人で彼を囲むようにしゃがみこんで、親しげにしゃべりながら足もとの草をぶちぶちと抜く。

こうやって見ていると、松浦は案外愛想がいい。

自分から盛り上げるわけではないが、女子に囲まれて照れるでなく、ごく自然に受け答えしているようだ。

図書室からは、その楽しげなようすまでは見えなかったけれど。

沙雪はなぜか苦しくなつて図書室の窓から離れた。

だけど今日、4日目。木曜日。

今日は誰も松浦の元を訪れない。

もしかしたら1階の窓から先生が監視しているのかもしれない。

松浦は草をむしりながら、ときどき腕を振り払うようにする。

そうかと思うとぴしゃんと半そでから出た腕を叩いている。

きつとヤブ蚊でもいるのだろう。

そうやっているとやっぱりみじめで。沙雪は罪の意識を感じる。

沙雪は松浦に謝るべきか、レイコに相談してみた。

レイコには土曜日のことを話している。ファーストキス以外のことは。

「サユが言いつけたわけじゃないんだし。来週、謹慎が解けてからでいいんじゃない？」

「でも……」

レイコの答えに沙雪は納得できなかった。

沙雪が言いつけたわけではないけれど。杉本がチクったのは沙雪のせいかもしれない。

現に杉本はあれから廊下ですれ違っても、まるで知らない人のような態度を取る。

沙雪としては、そうしてくれてむしろ歓迎でもあるけれど、ただ松浦のことを、そしてキスのことを思い出すと腹立たしい。

だけど、詰め寄るわけにもいかないし、どうすることもできない。

それに。

土曜の夜、酔っ払ってた沙雪を駅まで送ってもらったのにお礼も言っ  
てない。

月曜日の朝から松浦は謹慎に入っているから、顔を合わすチャンスがないのだ。

「メアドとか知ってたらねえ……」

レイコがいう。本当にそうだ。

松浦と同じ中学だったという古田に頼んで、松浦のメールアドレスを聞き出せないだろうか、とも思いついた。

だけど。

詳しい事情を話していない古田から何か誤解を受けるのは嫌だった。

朝は登校時間が違うし、夕方はいつのまにかいなくなっている。

そんなわけで沙雪は、今日も何も言えないまま、図書室の窓から松浦の背中を目の端で意識するだけだった。

沙雪は窓に沿って置かれた低い本棚の上を雑巾で拭いていた。

「三次さん。それくらいで終わっていいわよ」

司書の女性が声をかけてくれる。だが、沙雪はことさら丁寧に雑巾をかけていた。

この作業をしていれば、ごく自然に松浦を眺められるから。

松浦は、図書室の真下で草抜きをしているようだった。

真黒に見える地面の中で、彼の半そでシャツは紫色に浮かび上がるようだからすぐにわかる。

と。

ふいに松浦が顔をあげた。

のぞきこんでいた沙雪は思わず心臓が止まるかと思った。

もはや、知らんふりはできない体勢。

心臓が止まって行き場がなくなった血が、カッと顔に集まってくるのがわかる。

行動に迷った沙雪は、ぺこりと頭を下げた。

同級生にする行動じゃない、とすぐに後悔したが、それ以外思いつかなかったから仕方ない。

松浦は立ち上がると、同じようにぺこりと頭を下げた。

その顔にはわずかに笑みが浮かんでいて……ただどホツとしたのは一瞬で、沙雪はとまどった。

今度は、止まっていた心臓がドキドキと体中を震わせはじめたからだ。

でも、松浦から目を離せない。

松浦はキョロキョロとあたりを見渡すと、

「三次さん」

と下から手招きした。

## 12 処分 3（後書き）

### 休載のお詫び

先日、週1程度の不定期更新と申し上げておりましたが、企画運営ならびに企画用新連載で、こちらを更新するのが難しくなっていました。

構想は頭の中にあるのですが、小説として文章にするには、その世界に全力で没入しなくてはなりません。

ただ、私の頭の粗悪な性質および時間のなさより、日替わりでまったく違う世界に没入するのはとても困難だということがわかりました。

本来ならば先に書き始めたこちらを完結させてから、新連載を書かなくてはならないことは百も承知なのですが、多くの人が関わっている企画のほうも成功させなくてはなりません。

そんなわけで企画を開催している5月までの間、こちらは基本的に休載させていただきます。

楽しみにされていた読者各位には大変申し訳ないですが、なにとぞご了承くださいねと思います。

ただし、必ず復帰することを約束させてください。

まだ、序盤ではありますが、ラストまで話は決まっているので、ぜひ完成させたいと思っています。

復帰の際には、また読んでいただけると嬉しいです。

また、作風はまるで違いますが、3 / 25より始まる企画用新連載「失ったもの、守るべきもの」をお読みいただけると大変ありがたいです。

それではよろしく願いいたします。

びよ 拝

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0312d/>

---

恋のあとさき 追いかけてる

2010年10月10日14時33分発行